第一話　オズボルンの笛

むかし昔、ある所に貧乏なお百姓が住んでゐましたが、たうとう借りてゐた田地を地主に還さねばならぬ破目（はめ）になりました。けれども、田地はなくなっても、三人の男の子がありました。その名はピータとポオルとオズボルン・ブーツでした。三人は家でぶらぶらしてゐて、爪の垢ほどの仕事もしようとはしません。たださうしてゐるのがよいことだと思ってゐました。また三人はどんな仕事にも自分らはよすぎるものだと思ひ、何事も自分らには満足の出来ないものだと思ってゐました。

ところが、或る時、ピータは王様が兎の番人を求めてゐらっしゃると聞いて、父に行きたいと申出ました。ピータは、誰あらう貴い王様に仕へるのだから、その仕事は自分にすっかり適してゐると、かう申しました。年とった父親は、それよりか、も少しよくピータにむいた仕事がありさうなものだ、と思ひました。王様の兎の番をするものは、身軽で素早くなくてはならぬし、なによりも怠け者であってはいけない。兎が跳（は）ねたり、躍（と）んだりするときには、彼方の家

から、此方の家へ、ぶら〳〵と遊び廻って暮すのとは、まるで違ったことだらう、と思ったからでした。ところが、父親の意見はなんのききめもありません。

ピータは行きたい、行かねばならぬと決めて旅囊（たびぶくろ）を背負って、こと〳〵と小山を下って来ました。で、ピータが遠くへ行って、またその遠くよりも、なほ遠くへ行ったときに、一人のおばあさんに出会ひました。そのひとは、木の切り株にぴったり突き刺してゐた自分の鼻を一しょけんめいに引き離さうとしてゐました。で、ピータはおばあさんが鼻を離さうと、引き上げたり、引張ったりしてゐるのを見ると、すぐにから〳〵と哄笑（おほわらひ）しました。

「其処に立って笑はないでおくれ。」とおばあさんが言ひました。それよか此処に来て、年とったちんばを助けておくれ。わたしは少しばかり薪を割らうとしたところ、鼻をこんなところに突き刺してしまっただ。だから此処に立って曳いたり、裂いたりして、何百年って間、一口も食べ物を食べないのだよ。」と、さうおばあさんは言ったのでした。

それでも、ピーターは、ますます笑ってすばらしく面白いと思ひました。そんなに何百年も立ってゐたのなら、これから先きだって何百年も続けられるだ

らう、と言っただけでした。

ピーターは王様のご殿に着くと、すぐに兎の番人に召抱へられました。番人のお務めは悪い仕事ではなくて、甘い食べ物と、良いお給金とが貰へるし、おまけに、お姫様を頂戴することが出来るかもしれないのでした。ですが、もしも、兎を一匹でも失くさうものなら、ピータの背中から赤い筋を三本切りとって、それからピータを蛇がたくさんにうよ〳〵してゐる穴に投げ入れるといふのでした。

ピータが兎小舎や農園にゐる間は、兎を一群にして飼ってゐましたけれど、日がたって兎を森に連れて行ったとき、みな躍んだり跳ねたりして、丘を走り下ったり、走り上ったりしました。ピータは、それを追って此方へ走ったり、彼方へ走ったりして、一匹でも残ってゐるときは、走ってばかりゐたので、体がおほかた破裂しさうになりました。で、たうとう、おしまひの兎を見失ってしまったときは、ピータの息は切れさうでした。それからは、兎の姿はすっかり見えなくなりました。

夕方になって、家路へぶら〳〵と足を向けて、畑の柵に来るたびに、立って

呼びましたけれど、一匹も兎は出て来ませんでした。ご殿に戻って来ますと、もう王様は小刀をお手に持って、ちゃあんと待ちかまへてゐられました。それからピータの背中から三本の赤い筋を切り取って、そのあとへ胡椒と食塩とを擦りこんでから、ピータを蛇のうよ〳〵してゐる穴に投げ入れました。

しばらくたってから、弟のポオルが王様のご殿へ行って兎の番をしたい、といふことになりました。年とった父親は同じことを言ってきかせ、また、外にも、いろ〳〵と言ってきかせました。けれども、ポオルはぜひ行かねばならぬ、行きたい、といふのでした。で、なんとも、仕方がなく、とどのつまりは、ピータのときと全く同じで、良くもなく、悪くもなかったのです。年よりの女は同じ所に立っていて、木の切株から自分の鼻を曳いたり、裂いたりしてゐました。ポオルは笑ってすばらしく面白いことだと思ひ老婆がせっせとやってゐるのを見ながら其処を通りすぎて行きました。ポオルはすぐに兎の番人に召し抱へられましたし、誰も反対する者はありませんでした。けれども兎は躍んだり跳ねたりして丘の下の方へ離れて行きました。ポオルは駈け廻って、土用の仔犬のやうに、ふうふうと喘いでゐました。でポオルが一匹の兎をも連れないで、夜

になって帰って来ますと、王様は大玄関で小刀を持って、ちゃあんと用意して立ってゐられました。すぐさま、ポオルの背中から三本の太い筋を切り取って、そのあとへ胡椒と食塩とを擦りこんで、それから蛇の穴の中へ投げ入れました。

さてそれからしばらくたって末の子のオズボルン・ブーツが王様の兎の番をしにひどく行きたくなりまして、その心持ちを父親に打開けました。ブーツは、森や野の中に入って、野苺のしげみの傍をとほり、兎の群をひきつれてゆき、そのあひまには、日当りの良い小山の坂で横に寝たり、眠ったり、日向ぼっこをするのは、自分に持ってこいの仕事だらうと思ひました。

父親は、ブーツには、も少しよく向いた仕事がありさうなものだと思ひました。もし二人の兄弟よりか悪くならなくても、それよりも、良くゆくとは思はなかったのです。王様の兎の番をする男は、靴下に鉛の底を付けてゐる怠け者や、烟油壷の中の蝿のように、ぐづ〳〵してゐてはならない。兎が日当たりのよい小山の坂で跳ねたり躍んだりし出すと、手袋をはめて蚤を捕るのとは、まるっきり違った仕事だからです。いいや、あの仕事を背中に無疵でしおうせるのは、たゞ身軽で、すばしこいばかりではいけない。空気袋や鳥の羽よりも、

早く飛び廻らなくてはならない。
「よし、よし。どんなに、ひどいことかしれんが、かまふことはない。」と、ブーツは言ひました。
ブーツは、どうしても王様のご殿に行って、王様に仕へたいといふのでした。王様よりか下のものには、仕へたくないからで、それにまた兎の番はわけなく出来ると思ったからでした。兎は自分の家の山羊や仔牛よりか、面倒なものではあるはずはない。で、ブーツは肩に旅嚢をかたげてから、丘をぶら〳〵と降りて来ました。
そこで、ブーツが遠くへ行って、また遠くよりもなほ遠くに行って、ひどく餞じくなったとき、ブーツも年よりの女に会ひました。その女は木の切株に堅く挾まれた鼻を引っ張って、もぎ離さうとしてゐました。
「今日は、おばあさん。気の毒に年とって、ちんばのおばあさん。其処に立って鼻を研いでゐるのですか。」と、ブーツは問ひました。
「はて、今まで何百年の間、わたしを、おばあさんといってくれたものは、ただの一人もなかった。どうぞ、ここへ来て、わたしを助けて放しておくれよ。

それからなにか食べ物を恵んでおくれ。長い間、ずっとなに一つ食べたことはないんじゃから。いつかきっと、やさしくして親切にしてあげるよ。」とおばあさんは言ひました。

さう、ブーツは、その年とった女が、少しの食べ物とちょっとばかりの水を欲しがるのは、もっともなことだ、と思ひました。

そこで、ブーツはおばあさんが、切株の割目から鼻を離しだせるやうに、切株を裂いてやりました。それから、座って一緒に飲み食ひをしました。で、そのおばあさんの食欲が、とてもよかったので、食べ物をおほかた独りで食べたことは、みなさんの想像されるとほりです。

食事が済んだとき、おばあさんはブーツに一つの笛をくれました。その笛は、かういふ笛でした。もしも、一方の口に息を吹きこむと、行ってしまへばよいと思ふものは、四方八方へ散ってゆきます。片方の口に吹きこむと、なにもかも、また一緒に集って来ます。それからもし笛が紛失するか、盗まれたなら、又それを欲しいと念じさへすればよい。さうすれば帰って来るのでした。

「なるほど、こりゃ相当な笛らしいね、これは。」とブーツは言ひました。

ブーツが王様のご殿へ行きますと、すぐさま兎の番人に決めてくれました。役目はあまり悪いことはありませんし、食べ物も、お給金も下さるし、その番が立派に務まるなら、多分そのうへに、お姫様を頂戴することが出来るかも知れないのでした。けれども、もし兎を一匹でも逃がしてしまはうものなら、ほんの仔兎一匹でも逃がしてしまはうものなら、ブーツの背中から赤い筋を三本切り取るといふのでした。王様はすっかり自信がありましたので、直ぐ小刀を磨ぎに、とりかかられました。

ブーツは。兎の番をするのは何でもなからう、と思ひました。兎は外に出るときは羊の群のやうに素直で、野路や農園にゐる間はたやすく群を作らせて、ついてこさせるからでした。けれども、兎が森の傍の小山に登って行ったときは、昼頃で、お日様が坂や山腹に照りつけて輝き出すと、みな小山じゅうに跳ねまはり、躍びまはって行きました。

「ほう！　ほう！　止まれ！　みんな行きたいって。そんなら行け！」

とブーツは申しまして、笛の一方の口に息を吹きこみますと、皆八方へ走っていって一匹も後にはゐませんでした。けれども、ブーツは古い炭焼場に行きつ

いたとき、片方の口を吹きました。すると、瞬くまに兎はみんな其処に集まって来て、隊を作って整列しました。それで、ブーツはちゃうど、観兵式の兵隊さんのやうに、一目でみんなを観ることが出来ました。「なあるほど、相当の笛のやうだね、これは。」とブーツは申しました。

それから、日当りの好い斜面に横になって眠りました。で、兎は夕方まで跳ねたり、躍んだりして遊んでゐました。そこで、ブーツはまた笛を吹いて、みんなを集めて、羊の群のやうに引連れて王様のご殿に降って参りました。

王様と、お后様と、それからお姫様も、みんな表玄関に立ってお出になりまして、兎をこんなに連れて戻ってくるやうな男は、さてどういふ男かと不思議がりました。で、王様は指を折って兎を数へ、幾度も幾度も数へなほしました。でも、一匹すらも、なくなってはゐません。――いいえ、仔兎一匹ですらなくなってはゐません。

「相当な若者でございますわ、これは。」とお姫様が言はれました。

翌日、ブーツは森に行って、また兎を番することになりました。ですが、ブーツが、野苺の叢に寝て休んでゐましたら、どうして王様の兎をそんなに立

派に番するのか、それを見定めさせようと、ご殿から侍女を一人つけてよこしました。

そこで、ブーツは笛を取り出して見せてから、笛の一方の口を吹きましたら、兎は丘や谷に、風のやうに躍(と)んで行きました。それから、片方の口を吹きますと、兎はみんな泡(あは)を喰(く)って叢に戻って来て、みんな、また隊を作ってゐました。

「なんて、可愛いお笛ですこと。」と、侍女は申しました。もし、売ってくださるなら金百円さしあげませう、と言ひました。

「さうです！　こりゃ相当な笛でござんすよ。ですから、これはお金だけでは、あげられません。でももし金百円と、それから一回ごとに接吻を一つ下さるなら、あげませう。」

「はい！　いいですとも！　もちろん、そのとほりにしませうね。お金一円に接吻を二つを添へてあげませう。おまけにお礼も申しますわ。」と言ひました。

そこで、侍女は笛をもらひました。けれども、王様のご殿まで戻ったとき、笛はなくなりました。ブーツが笛に戻って来いと念(ねん)じたからでした。で、夕方になると、ブーツは、ちゃうど羊の群のやうに兎を連れて帰って来ました。

そこで、王様がいかほど数へても、調べても、かひはありませんでした、――兎の毛一本すら、なくなってはゐませんでした。

ブーツが、兎の番を始めてから三日目に、ご殿からはお姫様をさしむけて、笛を取らせようとしました。お姫様は雲雀（ひばり）のやうに快活にされて、もし笛を売ってくれて、安全にご殿まで持って帰るには、どうすればよいか言ってくれるなら、金二百枚を進ぜようと仰せられました。

「さうです！　さうです！　こりゃ相当の笛でございます。これは売り物ではございません。けれども、もしお姫様が金二百円下さって、おまけに、一円ごとに接吻を一つ下さるなら、お姫様のご用に立てませう。そしたら、お姫様は笛をお持ちになれませう。もし笛を持っていらっしゃりたいなら、よくご用心なさらねばいけません。それはお姫様のお務めでございます。」とブーツは言ひました。

「一本の兎笛にしては、大いさう高いお値段ですこと。」とお姫様はお考へなさいました。その上ブーツに接吻せねばならぬことを想って口を歪（ゆが）めました。

「けれども、まあ、ここはご殿から遠い森の中で、誰も見はしないし、聞くこ

とも出来はしない。どうも仕方がない。わたし、どうあっても、この笛が欲しいし、手に入れたいから。」と、お姫様は仰しゃいました。

それで、ブーツが受け取るものを、みんな受取ってしまふと、お姫様は笛をもらって、帰っていって、途中ではずっと、指でしっかと持ってゐられました。けれども、ご殿に着いて、取出さうとしますと、指からする〳〵とぬけ出て、なくなってしまひました。

翌日はお后様ご自身が行って笛を取って来ようと仰せられました。お后様は、きっと笛を持って帰って来るとの仰せでした。

ところで、お后様はお金のことは誰よりもけちけちしていらっしゃって、五十円だけしか出さぬとのことでした。けれども、とどのつまり、値段を三百円まで引上げなくてはなりませんでした。ブーツは、笛は相当のもので、代償のないものであるけれども、お后様のご用なら金三百円を下さって、おまけに、一円ごとに接吻を一つ添へて下さるなら、手放してもよろしい、それならお后様はお持ちになってもよろしゅうございます、と申上げました。で、ブーツは接吻は十分に払っていただきました。お后様は、おまけの方はあんまりけちけ

ちしてはゐらっしゃらなかったのです。

そこで、お后さまが笛をおとりになったとき、ご自身のお体にしっかと結びつけて、よくお気をつけてゐられました。ですが、お后さまも他の人たちより髪の毛一すじも、うまくはゆきませんでした。ご殿にお帰りになって、取出さうとなさいますと、笛はなくなってゐました。夕暮にブーツは、兎をすっかり馴れた羊の群のやうに追ひながら、小山から降りて来ました。

「途方もないたはけた話だ。そのくだらぬ笛を必ず受け取ってくるには余自身で行ってみなくてはならんわい。外に方法はないやうだ。」と、王様は仰せられました。

で、翌日ブーツが兎を連れて森の中に深く入って行きますと、王様はこっそり後から跟いて行かれました。すると、ブーツが以前に侍女や、お姫様や、お后様と掛合ったところの、日当りの好い、丘の斜面に寝てゐるのを見ました。

さう！　王様とブーツとは親しくなりまして、しごく楽しげでした。ブーツは笛をご覧に入れて、初めに一方の口から吹いて、それから片方の口を吹きました。王様はそれを可愛い笛だとお思ひになって、たうとう黄金千円払っても

お買上げになりたいやうな、お気持になりました。
「さうです！　これは相当の笛でございます。お金では得られないものでございます。ですけれども、王様は、あすこの白い馬をご覧になれますか。」と、ブーツは言って森の中を指(ゆびさ)しました。
「見えるかって！　勿論、見える。あれは予の愛馬、白龍(はくりゅう)だ。」と、王様は仰せられて、そんなことは言わなくても判ってゐる、といふやうなご容子でした。
「よろしい！　もし、陛下が、黄金千円をわたくしに下さって、それから、彼処の澤(さは)にお出になって、太(ふと)い樅(もみ)の木のうしろで、あの白馬を接吻なさいますなら、この笛を差上げませう。」と、ブーツは言ひました。
「それよりか、外の値段ではいかぬか。」と、王様はお問ひなされました。
「いいえ、いけません。」と、ブーツは、言ひました。
「よろしい！　だが、予と馬との間に絹ハンケチを置いてもよからうな？」
「よろしゅうございます。御意のままになさってよろしゅうございます。」
かうして、王様は笛をお手に入れ、財布の中にしまひました。そして、その財布をポケットに入れて、しっかとボタンをかけて、ご殿へ馬に跨ってご帰還

なさいました。けれどもご殿に着いてから、笛を取り出さうとされますと、お后様や、お姫様や侍女と同じ目に遭ひました。笛はなくなりました。その時、ブーツは兎の群を追って帰って来ました。兎は毛一本もなくなってはゐませんでした。

王様は、ブーツが皆を馬鹿にし、王様からすら笛を騙しとったとお考へになって、恨んで、ひどいお腹立ちでした。そこで、勿論のこと、ブーツを死刑に処せねばならぬ、と仰せられました。お后様も同じ事を仰せられました。このやうな悪者は即刻かたつけるのが、一番にいい、とのことでした。

ブーツは、それは公平な処置でもなく、公正なことでもないと考へました、――需められたとほりにしただけでしたから。でも、ブーツは背中と命とを一しょけんめい守ってゐました。

そこで、王様はそれは致方がない、と仰せられました。でも、もしブーツが大きい醸造樽に虚言を一ぱい注いで、虚言が溢れ出るなら、命を助けてつかはす、との仰せでした。

それは長い仕事でもないし、危ない仕事でもなかったので、ブーツは勿論や

ってみませうとお返事しました。そこで、最初からどうしてそんなことになったのかを話し始めました。ブーツは、老婆と木の切株にくっついた鼻のことを言って、それから「さあ、酒樽を一ぱいに満たすのには、どし〳〵虚言を言はねばならん。」と言ひました。そこで、笛のこと、どうして、それを手に入れたか、そして侍女のこと、侍女が来て百円で買取りたいと言ったこと、その外に森の中でおまけの接吻のこと、などを話しました。それからお姫様が来られたこと、あちらの森の中で、誰も見もせず、聞くことも出来ないとき、笛を手に入れたいばかりに、とても雅(みやびや)かに接吻されたことを話しました。それから、言葉をとめて、――

「わたくしは酒樽を一ぱいにせねばなりませんから、どし〳〵虚言を言はねばなりません。」と言ひました。そこで、お后様のことを話、お金はけちけちしてゐたこと、接吻は豊(ゆた)かだったことを話しました。

「酒樽を一ぱいにするには、ひどく嘘をつかねばなりません。」と、ブーツは申しました。お妃様は、

「わたくしは、酒樽はもうかなり一ぱいになったと思ひますわ。」と仰せられま

した。
「いや！　いや！　一ぱいでない。」と、王様は仰せられました。
そこで、ブーツは、王様がお出でになったこと、沢にゐた白い馬のこと、もし王様が笛をご所望とあらば、王様は、――「さやうです、陛下、もし酒樽を一ぱいにせねばならんのなら、わたくしは話をつづけて、ひどく虚言をつかねばなりません。」とブーツは言ひました。
「待て！　待て！　若者！　酒樽は縁まで一ぱいになってゐる。溢れ出してゐるのが見えないか。」と王様は仰せられました。
そこで、王様も、お后様も、お姫様をブーツに縁づけ、王国の半分を分け与へるのが一番に良い、とお考へになりました。ほかになされやうもなかったのです。
「ありゃ相当な笛だ。」と、ブーツは申しました。

解説と註

末子成功説話、物臭太郎型、婿選び型、出雲神話の大国主命の話と類似する。尚印度に「クリシナの笛」がある。